



Title	災害時の心理的回復過程と被災者の時間
Author(s)	酒井, 明子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (酒井 明子)

論文題名

災害時の心理的回復過程と被災者の時間

論文内容の要旨

本研究は、災害という大きな困難に直面した被災者の心理的回復過程と被災者の時間を分析した質的研究である。今日の大規模な災害による被害の甚大さや避難所・応急仮設住宅の設置期間の長期化等は、大切な家族や住み慣れた家を失い生きる意欲を失った人々や自力で生活展望を考えることが困難な高齢者の孤立死や自殺、閉じこもり問題を加速化させており、心理的回復過程も長期化し複雑さを増している。しかし、災害時の心理的ストレスの変化は、段階的あるいは単線的な心理的回復過程であることが暗黙のうちに前提とされている。それは段階的・単線的に徐々に回復していくという物理学的な時間認識である。従って、その前提で被災者と関わる支援者の実践のあり方についても問い直しを行った。

本論文は全7章から構成される。

第1章では、私自身の災害体験をもとにした研究への着想経緯と時間への疑問など実体験の意味を問うように先行研究の整理と検討を行った。その際に論点としたのは、心理的回復過程を段階的や単線的に表現することへの批判的な分析である。一般的なストレス及びストレス反応、そしてストレス反応が非常に強い場合にみられるトラウマ反応について記述し、災害後の時間経過に伴う心理的变化としてPTSD (Post Traumatic Stress Disorder) の診断基準は災害によって異なる可能性があることを指摘した。そして、災害後の時間経過に伴う心理的变化を段階別に分類する理論に影響を受けた支援は画一的にならざるを得ないことを問題提起した。その上で、国内及び国外の先行研究における多くの心理学的研究が、長期的調査や長期的ケアを促す傾向にあるが、実際には長期的な縦断的研究は少なく、災害後の心理的回復過程を検討するためには経時的な変化を考慮する必要があり、その場合、同じ対象を追跡した縦断的研究が重要となることを強調した。本研究では個人の心理的回復過程を心理的变化ラインの自己描写と語りの内容で捉え、7年間の個人の心理的变化ラインの時間軸を重ね合わせて分析したことに独創性がある。

第2章では、海外で発生した災害事例をもとに心理的变化について検討した。本章で提示するのは、ジャワ島中部地震、四川大地震、ハイチ地震である。これらの災害には、宗教や地域格差や支援格差、貧困などによる心理的变化がある。このことを調査や参与観察によって記述し、これらの指標について検討した。これは、第5章以降で展開する被災者の時間の分析に意味を与えた。貧困や子ども、高齢者など社会的に弱い立場の人たちが犠牲になることは、途上国のみの問題ではなく先進国にもみられるため、途上国から学ぶことの意味も追求した。

第3章では、東日本大震災後7年間の心理的回復過程の横断的・縦断的調査について述べた。本研究の研究協力者は、東日本大震災の被災者で岩手県・宮城県在住の高齢者である。横断的調査は、1年目（仮設住宅入居後の時期）、4年目（仮設住宅退去の時期）、7年目（災害公営住宅あるいは再建した自宅入居時期）に収集した25名のデータを分析対象とし、内容分析を行った。その結果、人間関係・住環境・健康状態は震災後1年目・4年目・7年目に共通する要因として出現しており、心理的变化に長期的に影響する要因であろうと考えられた。更に語りの内容を文脈に留意して分析したところ、心理的变化に影響する要因は、プラスとマイナスの反応を示していた。つまり、場面によって裏腹な気持ちもたらされており、アンビバレントに心が揺れ動いていることが明確になった。特に注目すべきことは、その質的变化である。人間関係は徐々に新しいコミュニティ形成につながる方向性がみられた。住環境は、地元で自宅を再建したいという願いを根底に持ちながら、新しい住環境に適応していくことが心身に影響を与えていた。健康状態は避難所および仮設住宅の環境や栄養状態、内服薬の中断が影響し、必ずしも改善傾向には向かわず、健康状態の変化は心身に長期的な影響を与えていた。このように被災者の心理的回復過程には、住環境や人間関係、健康状態など、様々な要因が絡み、ストレス反応の程度、回復プロセスにかかる時間は様々であることが明らかにされた。

一方、以下の側面で問題が残されていた。個人の災害発生直後からの心理的回復過程はどのような経過を辿るのか、

深刻なストレスが慢性化に陥りやすくなる原因は何かである。そして、このようなこころの問題への洞察を深めるにはどのようなアプローチが有効なのかという研究方法を追求することである。縦断的調査では、同一人物の心理的回復過程を長期的に追跡することにした。研究方法は、震災後1年目、4年目、7年目の時期の災害発生直後からの心理的变化ラインの自己描写と心理的变化ラインに沿って災害時の体験や心理的变化に影響する要因について語ってもらう半構造化面接法である。この同一人物を長期的に追跡するプロセスにおいては、暗黙のうちに前提とされている段階的・単線的な心理的回復過程が、真なる被災者の心理変化を示すものなのかを重要な視点とした。結果としては、震災後1年目・4年目・7年目に調査した心理的变化ラインの時間軸を合わせて重ねたところ、ストレスのレベルが調査回によって異なった。つまり、調査時の段階では、今は自身の思いを伝えたくないという理由から意図的に心理的变化ラインを操作した協力者と無意図的にストレスのレベルが異なっていた協力者がいた。前者については、被災者と研究者の関係性を分析し、こころの問題への洞察を深めるためのアプローチを考えるきっかけとした。後者は、被災者の時間の意味を考える基礎的データとした。結果としては、心理的回復過程は段階や単線で示せるものではないと考えることが妥当であることが明らかとなった。また、社会的孤立状態となり深刻なストレスが慢性化に向かう要因には家族や身近な人の存在が影響しており、身近な人との人間関係は回復過程の鍵となると考えられた。

第4章では、第3章の調査結果から得られた被災者と研究者の心理における課題を整理し、当事者（被災者）と非当事者（研究者）の関係性を検討した。つまり、東日本大震災後7年間の心理的回復過程の縦断的調査で意図的に心理的ラインの自己描写を操作した協力者は、なぜ語らなかったのか、なぜ語れなかったのかを問いかけ、その意味を当事者と非当事者との関係性から紐解いていくことを試みた。被災者と研究者の位置関係は、当事者に密着し地を這う低いところに視点をおくのであるから、まずは被災者の傍に佇むこと、被災者の論理が優先されることを実践的に明らかにした。さらには人間の尊厳を重視し、当事者支援に徹した故黒田裕子氏の実践から当事者の視点にたった被災者支援のあり方についても学び深めた。

第5章では被災者の時間について、第2章及び第3章で提示した国内・国外の事例をもとに分析しながら検討した。まず、時間に関する学問的検討は古典的時間論をベースにししながら、木村（1982）の災害における「時間」と〈時間〉の差異の考え方を提示した。さらに矢守（2018）の〈時間〉を駆動する二つのダイナミズムの概念図をもとに、東日本大震災後の被災者の時間のありよう、海外の被災地における被災者のありようから被災者の時間の意味を見出していった。被災者の時間は、過去の未定性の体験、未来の既定性の体験、あるいは過去の未定性と未来の既定性が突出した状態を同時に体験しながら過ごしていた。また、過去や現在が未来に入り込み自分を追い込んでいる状態にある人もいた。つまり、被災者の時間は、自己のありようと関係しており、物理学的な時間、固定化された時間ではなかった。重要なことは、現在、つまり今という時間の捉え方であった。いまの自分がいままでの自分やいまからの自分に関して、自分自身とどのように関わり、自分自身をどのように見出しているかという今の自分が主体になる時間感覚が過去や未来という時間の方向性を軌道修正していくのではないかと考えた。したがって、支援者は、災害によって、被災者の時間がどこかに位置づいたり、位置づかなかったりするかもしれない、過去も未来も実に不安定な現れ方をするかもしれないと考え、被災者の時間を優位に考える姿勢を身につけなければならない。特に重要なことは、現在のあり方であった。被災者の未来がより豊かなものになるためには、寄り添う、ただそばにいるという現在に向けられた過ごす関わりが肝要であることが明確になった。

第6章では本研究で示唆された災害時の心理的回復過程と被災者の時間に関する全体的考察を行った。災害時の心理的回復過程における反応は段階や1本の曲線だけで一元的に示されるべきものではないことの示唆や心理的变化に影響する要因の特徴、心理的变化に影響を及ぼす当事者と非当事者との関係性から被災者がありのままに生きた真なる時間を見出すことが重要であることを結論付けた。

第7章では、本論文の結果を被災現場でどのように活かし応用できるか支援のあり方について検討した。支援者と被災者との出会いの瞬間と相互行為、被災者の時間と支援者の時間のズレ、「時間」の軸の転換を行うという視点を提示し実践的な視点で論じた。

最後に、特に重要なことは、現在、つまり今という時間の捉え方であること、支援者は被災者の未来がより豊かなものになるためには、寄り添う、ただそばにいるという現在に向けられた過ごす関わりが肝要であることを結論づけた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (酒井 明子)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 渥美 公秀
	副 査 教授 中道 正之
	副 査 教授 佐藤 眞一

論文審査の結果の要旨

本論文は、東日本大震災（2011）発生から7年目までの被災者の心理的变化に影響を及ぼす要因と被災者が辿る心理的回復過程や被災者の時間を明らかにした質的研究である。災害後の心理的回復過程は時間経過に伴って段階的に回復するとされる概念が主流であり、災害現場では個別的な支援よりもマニュアル化された画一的な支援に傾きやすい。従って、本研究で論点としたのは、心理的回復過程を段階や単線で表現することへの批判的な分析である。国内及び国外における多くの心理学的研究が、長期的調査や長期的ケアの必要性を指摘しているが、実際には長期的な縦断的研究は少ない。災害後の心理的回復過程を検討するためには経時的な変化を考慮する必要があり、その際、同じ対象を追跡した縦断的研究が重要となる。そこで、本論文では、東日本大震災発生から7年目までの心理的回復過程における横断的・縦断的調査を実施し、被災者個々の心理的变化に影響する要因および心理的回復過程における被災者の<時間>を明らかにしている。

第1章では災害後の時間経過に伴う心理的变化を段階別に分類する理論に影響を受けた支援は画一的にならざるを得ないことに対して問題提起がなされている。第2章では、海外で発生した災害事例をもとに心理的变化について検討し、宗教や地域格差や支援格差、貧困などによる心理的变化が災害時の心理評価の指標になることが提示されている。

第3章では、東日本大震災後7年間の心理的回復過程の横断的・縦断的がなされている。まず、横断的調査では、心理的回復過程にみる心理的变化要因とその特徴を明らかにしている。縦断的調査では震災1年目、4年目、7年目のすべての時期にデータが得られた研究協力者の立場や差異に触れながら心理的回復過程において心理的变化に影響する要因や特徴、回復の鍵を見出している。第4章では、第3章の調査結果から得られた被災者と研究者の心理における課題を整理し、当事者と非当事者の関係性を検討している。つまり、東日本大震災後7年間の心理的回復過程の縦断的調査で意識的に心理的ラインの自己描写を操作した協力者は、なぜ語らなかったのか、なぜ語れなかったのかを問いかけ、その意味を当事者と非当事者との関係性から紐解いている。

第5章では被災者の時間について、木村（1982）の災害における「時間」と<時間>の差異の考え方を提示し、さらに矢守（2018）の<時間>を駆動する二つのダイナミズムの概念をもとに、被災者の<時間>は安定的なものではなく、未定性や既定性によってつねに揺れ動くが、この不安定さそのものが被災者が生きているあるがままの時間であることが考察されている。

第6章では本論文の全体的考察として、心理的回復過程に影響する要因はアンビバレントに揺れ動くこと、被災者個々の心理的回復過程における反応は単線では示せないこと、被災者の時間は被災者がありのままに生きた真なる時間であることを提示している。

終章では、本論文の結果を被災現場でどのように活かし応用できるか支援のあり方について実践的な視点で論じている。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしい内容を備えていると判定する。